

## 第四十八話 平成三十年九月九日

目顔で知らせる

武士は無口であった。一度、口にすると取り返せない。「武士に二言無し」である。

「手打ちにしたす」と口にすると斬殺しなければならぬ。

で、目勝つ {まかつ} する。いまどきの辞書を引くと「人を圧倒するように見据える」とあるが、武士の世の目勝つは、こんな生易しいものではなかった。鯉口に手がかかっていた。

家人などには目色 {めいろ} を変えてイエス・ノーを知らせる。

下僕を叱るときは目に角 {かど} を立てた。

女中たちが大声で話していると、目に物言わず

孫らが手毬で遊んでいると、目笑 {もくしょう} する。

v 同輩には目交ぜする。「今夕、一杯やるか」

往来で十手持ちが威張って歩いていると、目を側 {そば} める

そのむかし、武士の作法の書を著した。目づかい、顔づかいの用語を頻繁に使用した。

誰が云い出したのか。「言葉にしなければ伝わらない」

これが子供、大人、老人の間で闊歩する、ご時勢。目引 {まびき}、目伏し {まぶし} などの目の力を失った。目合 {まぐあい} も死語になる。

「目は口ほどに物を云う」が死語になる日も近い。

言葉は嘘をつく。顔、声は嘘をつけない。古の人の慣わしは<絶滅知恵>となる。